37th RECITAL 【1969 年（昭和 44 年）1 月 18/19 日】 神戸国際会館/フェスティバル

Ⅲ 中勘助の詩から	指揮	淵上　融
絵日傘		
椿	作詩	中　勘助
四十雀	作曲	多田武彦
ほほじろの声		
かもめ		
ふり売り		
追羽根		

組曲　「中 勘助の詩から」について　　多田武彦

私が関西学院グリークラブのために書いた最初の作品が、この組曲「中勘助の詩から」である。昭和34年１月、根津弘君の指揮で初演され、その年におこなわれた関学グリー創立60周年記念演奏会や東西四大学交歓演奏会では上木義和君の指揮で演奏された。今回、10年ぶりで初演団体によって演奏されることになったことは大変うれしい。

初演のプログラムに書いた私のメッセージのなかに、私は「関学グリーの今後のいちだんの発展を願うべく、従来の関学グリーの演奏に新風を与えるために書いた」と述べているが、今ふり返って考えると、まさに「盲人（めくら）、蛇に怖じず」で、自分の力量も顧みず、よくまあ大それた言葉を吐いたものだと恥ずかしくなる。

元来、音楽は作品と指揮者の解釈と演奏者の技倆とが一体とならなければ名演奏は生まれないと言われているが、私のこの未熟な平易な作品が、今日まで多くの団体に愛唱されて来たについては、当初の関学グリーや、当時の北村協一指揮東京コラリアーズの力に負うところが多いと感謝している。

この組曲は中勘助の詩集より７篇を選び作曲した。各曲の標題にもみられるとおり、日常生活の寸景を描いた題材に過ぎないが、中先生の珠玉のような詩情のおかげで、組曲全体を淡い抒情で包むことができた。

一つ一つの曲の内容は次のとおり。

〈絵日傘〉 絵日傘を持って遊ぶ子供たちの情景を、早いテンポで歌う。途中の独唱は、襖ごしに呼びかける風情である。

〈椿〉 わらべ唄風な旋律を早いテンポで演奏する。近所の久兵衛さんの家の立派な椿を、なかば諧謔的にほめあげる。

〈四十雀〉 ひょっとしたら、詩人は「白い頬の一人の若い女が嫁いで来て、そこで一人の男とずーっと仲よく暮らして行く」ことを、四十雀に託してほのぼのと歌いあげたのかもしれない。

〈ほほじろの声〉 ほほじろの声を聞いて、昔を思い、今も昔も変わらぬ孤独感をしみじみと歌い上げる。

〈かもめ〉 ゆりかもめのありさまを、わらべ唄風に可愛いらしく歌う。

〈ふり売り〉 人や動物が近づいてまた遠ざかって行く有様は、古今の作曲家たちが好んで用いる手法の一つである。私も、この第六曲目で、魚売りの呼び声を用いて、この手法を使ってみた。

〈追羽根〉 中勘助の兄は長年病苦になやまされ、兄嫁もその看病疲れのため床に俯しがちであった。その兄嫁に対するいたわりの気持をこめて書かれたこの詩は、追羽根の持つすがすがしい季節感とともに、中勘助の詩風を代表するほどのものであった。

Old Kwansei を口ずさむ私

作曲家　多田武彦

Tune every heart and every voice……に始まる Old Kwansei のこの歌を、私は今でもよく口ずさむ。学生時代に京大男声合唱団の指揮をしていた私がこんなことを言うのはおかしいのだが、関学グリーの名演奏に惹きつけられたのは、私が旧制大阪高等学校の一年生の時だから、むしろ、関学グリーとのおつき合いの方が長いということになる。

Old Kwansei を口ずさむと、ほとんどの場合と言っていいほど、まず林雄一郎先生の柔和な顔が浮かぶ。次に林慶治郎さんの端麗な指揮ぶりが想い出される。それから大学時代の良きライバルであり、かついろいろ助言をしてくれた松浦周吉さんや、今でも私の作品を私の意図に最も近い解釈で演奏してくれる北村協一さんの笑顔が見える。また、私が関学グリーのために書いた組曲「中勘助の詩から」や「雪明りの路」の初演のときの指揮者であった根津弘君や上木義和君の学生服姿が目に浮かぶ。

私が関学グリーの名演奏を聞きはじめて間もなく、私に男声合唱の美しさを大きく感じさせてくれたのは、昭和24年5月、関学グリー創立50周年記念演奏会であった。今年はあれから数えてもう20年にもなるが、この間、あの安定した名演奏を、ずっと聞かせ続けてくれている。この秘訣は、一体どこにあるのだろう、と私は私なりの方法で研究し続けて来たが、根強い伝統やチームワークや豊富な練習量のほかに、技術面で特に、私が最近巡回講演の際提唱している「楽譜に書かれていない表現方法」（世界第一級の名演奏家たちが忠実におこなっているところの「拍子の強弱関係の変化による表現」「音の開始時の硬軟の変化による表現」「残響型音型と持続型音型のさまざまな使い分けによる表現」「子音に費す時間の長短による表現」「先行するモチーフへの追随の変化による表現」「フレージングのための常識的手法」等）をメンバーの大部分が、自然のうちに体得している結果、だとわかった。（こうした諸点を注意しながら世界大学合唱祭や日本の合唱などのテープやレコードを聴くと、関学グリーが実に彫りの深い演奏をやっていることがよくわかる）こうしたことがわかった途端、私は、あらためて、関西学院グリークラブの伝統継承力の強さに感心させられた次第である。

Old Kwansei のあの歌声は、この伝統継承力を象徴するかのように、今でもいわば局外者である私の胸を打つ。私は、これからもずっと折りに触れ、この歌を愛しつづけるであろう。…… Her sons will give, while they shall live, Banzai, Banzai, Kwansei. と。